

クラス仲間を我が家に招待

9月末、夏季コースの最終日。授業の終了後、大学近くのカフェテリアで茶話会が持たれました。このコースを最後に母国に帰る受講生が何人かいたからです。ビールにつまみ、コーヒーといった簡素なものですが、担当教師も参加して送別会的な意味も含めていました。

席上、隣り合わせで座っていたリスベスと、ひよんなはずみで各国の食事メニューについて論議する羽目となりました。彼女の両親はメキシコ出身で、本人は今アメリカのニューメキシコ州の大学に学んでいます。大学のすぐ前に日本食レストランがあり、一度だけ入ったことがあるという。

「とてもおいしかったワ。でも、高くて私たちのような学生の身にして、そんなに時々行くわけにはいかないのよネ。日本食はおいしくてヘルシーだし、またスペインでも機会があったら食べたいなあ。特にスシなんか最高！」

「確かにそうかもしれないねえ」

なんて日本食論議をしているうちに、話はいつしか彼女にスペインでも日本食を味わわせてあげる方向へと展開していたのです。

「じゃ、一度、我が家に来なさいよ。スシは材料が揃わないからできるかどうかかわからないけど。せっかくだから、クラスの仲間と一緒に来たらどうかね」

・・・というわけで、皆を我が家(アパート)に招待することになりました。私にとっては、彼(女)らは、年齢的に自分の息子や娘のようなもの。我が娘も、かつてメキシコのグアナファト大学に留学したことがあります。そのとき、周囲のいろんな人に、何やかやとお世話になったようです。そう思えば、遠く母国を離れて学ぶ彼らに、若干でも激励になれば、恩返しというほどの大げさなものではありませんが、地球上のどこにあっても“お互いさま”じゃないかとの思いもあったからです。

それに、実は――。

私は定年になってからすぐに、自宅(東京・昭島市)近くの、クッキングスクールに1年間、通いました。現役中は、自分が厨房に立つことはほとんどなく、すべて妻に頼っていて、包丁の正式な使い方さえも知りませんでした。でも、時間ができた定年後は、料理の勉強をするチャンスです。元気な妻もいつ故障するかはわからない。そんな時どうやって食べていくのか。妻の食事は誰が作るのか。そうでなくても、お互いに助け合っていくのが、夫婦の生活の望ましいあり方でしょ



う。

さらに、自分で料理が出来れば、妻に余り負担をかけることなく、好きな時に自分の“悪友”をも呼び、いっぱい酌み交わすこともできます。また、海外に出たときに、いろんな人を家に呼び、話を聞き、話を伝え、交流を深めていくこともできる、といった思いもあったからです。

クッキングスクールでは、まず包丁さばきから煮物の作り方、日本料理、中華料理、それに西洋料理の基本を学びました。クラス8人ほどの生徒仲間は、主婦、新婚の若妻、結婚まじかの女子、それに私のような定年になった壮年でした。週1回、1年間の課程を終える頃には、かなりの手持ち“メニュー18番”ができていました。

やってみると意外に面白い。男にはそれぞれの立場があり、考えがあり、意見(沽券?)もあると思いますが、今まで料理なんて思ってもみななかった人も、ぜひ一度、挑戦してみたらどうでしょうか。「男、厨房に入るべし」の時代です。きっと、新しい世界が開けてきます。

そんなことから、リスベスから話が出たとき、“よーし、一肌脱いで、スペインでも料理に挑戦、若いみんなに喜んでもらおうか”なんて気持ちが、どこからか出てきていたのです。